

文化の街かど回遊マップ

行徳・妙典地区編

行徳・妙典地区の歳時記



十二月・一月
除夜の鐘(12月)
初詣(1月)



三月
妙典小学校前の河津桜



四月・五月
行徳・浦安
三十三札所巡り



八月・九月
江戸川ハゼ釣り



十月
五カ町祭礼



十月
春日神社祭礼

行徳・妙典の祭り

神明(豊受)神社祭礼(本行徳1丁目)

3年に一度、10月に開催。通称、五カ町祭礼。五カ町とは本行徳1丁目から4丁目までと本塩を合わせた地区。総鎮守とされる神明(豊受)神社を出発し、五カ町を練り歩く。大きな神輿とそのみ方が特徴。※市川市景観賞受賞

春日神社祭礼(妙典3丁目)

3年に一度、10月に開催。下妙典の鎮守である春日神社の祭礼で、神輿ではなく雄と雌の獅子頭が担がれることで有名。獅子頭は江戸時代に作られたものである。

八幡神社祭礼(妙典1丁目)

毎年10月に開催。総重量1トンはあると言われている神輿が特徴。大きくて美しい神輿は、拝殿で披露される。

稲荷神社祭礼(下新宿)

毎年10月開催。豊作を祈願する祭礼。五カ町祭礼では「下新宿渡御」が行われる。

胡録神社祭礼(関ヶ島)

3年に一度、10月に開催。古くは雄雌2基の獅子のみの巡行だったが、現在は獅子とともに神輿や山車も練り歩く。

豊受神社祭礼(伊勢宿)

3年に一度、10月に開催。伊勢宿の鎮守である豊受神社の祭礼。地元の精鋭たちに担がれた神輿が町内を練り歩く。行徳の独特なみ方が見もの。

行徳・妙典と信仰

「行徳」という地名は、室町時代になって記録上に登場します。また、戦国時代、金海法印という山伏が土地の開墾と人々の教化に勤め「徳」が高く、「行」が正しかったことから、人々から「行徳さま」と崇められたと伝えられています。その後行徳は「戸数千軒、寺百軒」と呼ばれる寺町として発展しました。一方、「妙典」という地名も法華経の経典が日蓮の唱えた「南無妙法蓮華経」のごとく、妙なる経典であるということからついた地名です。「行徳」と「妙典」は遥か中世の時代から、信仰とは切っても切れない関係のようです。

行徳と製塩

行徳といえば塩。その歴史は1000年以上あるといわれ、江戸時代、その製塩業は大きく飛躍することになります。いまでも本行徳に残る「権現道」は、江戸時代、徳川家康が船で江戸から東金・船橋に「鷹狩り」に向かう途中、行徳で下船した際に通った道といわれています。その際、家康を大いに喜ばせたのが、海辺に広がる製塩風景でした。当時の様子を伝える文献によると、徳川三代までの将軍が大金を費やして行徳の塩田を保護したこと、三代以後の将軍たちも「御普請」という形で保護を続けたことが記されています。二代目将軍秀忠、三代目家光が投入した額は、それぞれ3千両、2千両といわれていて、現在の価値にすると数億円以上とも!?



かつての塩田風景

製塩と水運

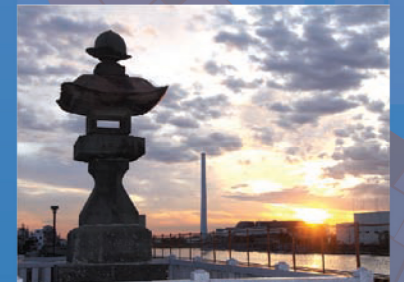
江戸時代、幕府による本格的な整備を受け、大規模化した行徳の製塩業は、関東で有数の生産量を誇るまでに成長し、それに伴って、江戸に塩を運搬するための水路が開通します。これにより、行徳から江戸日本橋まで船による塩の大量輸送が可能となりました。この水運はやがて野菜や魚を運ぶようになり、「行徳船」の登場によって、旅人たちも利用する便利な交通路へと進化していったのです。

行徳と川

行徳の西側を流れる旧江戸川。この川は古くからの製塩に始まり、物、人の流通によって、多くの富を行徳にもたらしました。一方で大水による川の氾濫、台風による高潮に悩まされるなど、行徳と旧江戸川は水害との歴史でもありました。今日、旧江戸川沿いを歩くと、大きくそびえ立つ護岸壁に圧倒され、容易に川面を覗き込むことはできません。一見、無機質にも見えてしまうその岸壁も、川と共存してきた行徳の人々の歴史の一部なのです。いまでも、この行徳地域では「江戸川」といえば「旧江戸川」のことを指し、北側を流れる現「江戸川」を「放水路」と呼び区別しています。これも江戸川に対する人々の「想い」の一端ではないでしょうか。



行徳橋と可動堰



常夜灯公園からの旧江戸川の眺め

一 権現道

権現とは徳川家康を指しています。むかし家康が東金で鷹狩をする際、江戸から船で今井の渡し(旧江戸川に架かる今井橋付近)を利用し、行徳を通り船橋へ向かったといわれている道です。現在は道が分断されており、幅2m余の細い道ですが、行徳街道ができる前からある古道で、沿道には多くの寺が並び「寺の町」行徳らしい街並みが今でも残っています。



二 徳願寺

もとは埼玉県にあった勝願寺の末寺でしたが、徳川家康の帰依により、新たに堂宇が建立され、徳川の「徳」と勝願寺の「願」の二字をとって、改めて徳願寺の名がつけられた浄土宗のお寺。行徳札所と呼ばれる「三十三ヵ所観音霊場」の札所一番にあたります。毎年11月16日(お十夜会)に公開される寺宝「宮本武蔵の達磨の絵と書」や「円山応挙の幽霊画」が有名です。(TEL 047-357-2372)



三 妙頂寺

弘安元年(1278年)日妙上人によって創建され、永禄4年(1561年)日忍上人によって、現在の地に移された日蓮宗のお寺。境内には樹齢200年以上の古木の百日紅(さるすべり)や、江戸時代の寺小屋の存在を偲ばせる筆子塚もあります。また、豊十畳はある釈迦涅槃図(寛保2年(1742年)製作)があり、8月20日の施餓鬼、11月13日のお会式に限定して公開されています。(TEL 047-357-2448)



四 妙覚寺

中山法華経寺の末寺で天正14年(1586年)に日通上人によって創建された日蓮宗のお寺。境内には東日本ではめずらしい、千葉県で唯一のキリシタン灯籠(織部灯籠)があることで有名です。江戸初期もしくは前期作の灯籠で、中央下部に舟形の中にマントを着たパレレン(神父)が靴をはいた姿が彫られています。なお、靴の部分が地中に埋められています。(TEL 047-357-3344)



五 法善寺

慶長5年(1600年)、大坂からきて塩焼を教えたという河本弥左衛門が出家し、宗玄和尚と名乗って創建した浄土真宗のお寺。地元の人からは塩場(しよば)寺と呼ばれています。本堂前の松の木下には、行徳の俳人たちが松尾芭蕉の百回忌に建てた句碑(潮家)「うたがふな潮の華も浦の春」があることで有名です。(TEL 047-357-2943)



六 神輿店 ①中台神輿 ②後藤神輿 ③浅子神輿飾

行徳の神輿は非常に有名で、日本全国に納められています。江戸中期頃から行徳で作られた堅牢な神輿が有名になり、神輿づくりが盛んになりました。神輿は古くは仏教彫刻を生業とする仏師たちによって造られたといわれ、港町でお寺が多かった行徳に仏師が住みつき、神輿づくりが始まったのではないかとされています。現在は、中台製作所が神輿の製造から販売まで唯一手掛けています。



後藤神輿の店舗壁面に残る彫物

七 常夜灯と旧江戸川

塩の産地である行徳では、江戸へ塩を運ぶために水運が発達しました。本行徳と江戸を往復する船は「行徳船(ぎょうとくぶね)」と呼ばれ、やがて人や物資の輸送にも使われるようになりました。江戸時代には成田山参詣客も利用するようになり、1812年、講中と呼ばれる信者が、航路の安全祈願のため高さ4.3mの常夜灯を建てました。平成21年に、常夜灯周辺は常夜灯公園として整備されました。

